ヨーロッパ産のトリカブトです。
トリカブトはキンポウゲ科に属する多年草で、葉は切れ込みの多い掌状葉です。温帯から寒帯地方に広く分布する属で形態も変異が多く、蔓状に伸びる種もあります。秋口に茎の先端部分に兜状の紫色花を開きます。前年の根茎が発芽し地上部が生育するとともに新しい根茎を形成しこれが附子です。親にあたる根茎が烏頭です。漢方薬には通常附子が用いられます。附子にはメサコニチン、アコニチン、ヒパコニチン等猛毒性のアコニチン系アルカロイドを含んでいますので、附子そのままでは用いられず、適切な修治が施されます。主に加熱することによりアセチル基が脱離して減毒しますが、冷えを治める作用や鎮痛作用は残っていますので付子剤と呼ばれる一連の処方に配合されます。
本画は1810年にウイリアム・ウイッドビイルによるメデイカルボタニーの1ページで手彩色による作品です。